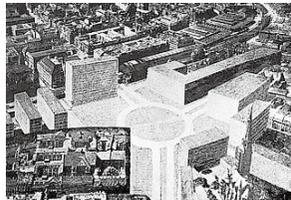


Terrain Vague Network

～都市のリダンダンシーと建築のふるまいについて～



02 テラン・ヴァーグと遊びの思想



テラン・ヴァーグ

その場所で起こった様々なことを想起させながらも、もはや空虚で占有されていない、不安定で曖昧な場であると同時に〈未知性〉や自由への期待を想起させる都市空間を示すフランス語の造語。

- TERRAIN →正確に区画された土地の広がり。同時に、広大で、さほど厳密に規定されていない領域（自分たちが都市外者であるような何らかの規定をすでに受けている土地の一区画）
- VAGUE(1)
- WOGE →ゆらぎのある、不安定な土地
- VACUUM, VACANT →用途や活動が不在の空虚な、占有されていない空間。同時に、解放された、利用できる、先約のない、希望・可能性と期待の空間
- VAGUE(2)
- 不確定の、不正確な、ぼんやりした、不明瞭な空間。同時に、このような不台がまさに、可動性、自由な移動、自由な時間への期待を含んでいるのである

イグナシ・デ・ソラ＝モラレス・ルビオー（Ignasi de Solà-Morales Rubió 1942-2001）

スペイン・カタルーニャ出身の建築家／歴史家／哲学者。その場所で起こった様々なことを想起させながらも、もはや空虚で占有されていない、不安定で曖昧な場であると同時に〈未知性〉や自由への期待を想起させる都市空間を示すフランス語の造語。ソラ＝モラレスが造った言葉であり、「場所の諸問題」をテーマとした、1994年のAnyカンファレンス（Any Place）で初めて発表された。

03 参考文献・作品



ロジェ・カイヨワ
(Roger Caillios 1913-1978)

『遊びと人間』を著したカイヨワは、自身も遊びを愛する美しい石のコレクターでもあった。「石が書く」では、次のように述べている。

“あちこちに石がみずから書き残したるしは、それにこたえを返す能のしるしの探索と精神を誘う。私はこうしたしるしの前に佇み、みつめ、記述する。そのとき、遊びがはじまる。発明であると同時に認識でもある遊びが、”



『ぼくの伯父さん』
ジャック・タチ (Jacques Tati, 1907-1982)

社会制度や経済と遊びの関係性が鮮やかに描かれている作品である。子供の遊びと大人の遊びを行き来できる唯一の人物として伯父さん（ロロ氏）が登場し、彼とともに映画の鑑賞者はその両方の世界の遊びを体験する。子供の遊びは荒唐や道徳での罰け事、大人の遊びは庭でのお茶会として、荒地と庭が対照的に描かれる。映画の中で人々は、この二つの対照的な世界を優雅に行き来するおじさん。普段は厄介者として扱いつつも、時々羨ましく思うであろう。そんなおじさんの背後にテラン・ヴァーグの空間が何度も写り込んでいる。



『Making Do and Getting By』
リチャード・ウェントワース (Richard Wentworth, 1947-)

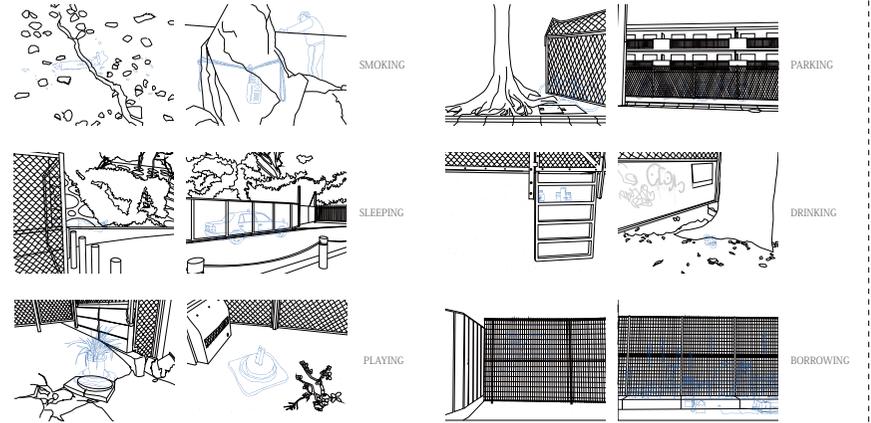
この写真集では、ゴムの長靴をドアの下に差し込んでおいておく写真や、フェンスの突っただ先に紙コップが刺さっている写真、ガタガタした舗装のくぼみにゴミ箱が集まっている写真や、何層も絡み合った舗装の写真などが集められている。これは無意識の、人間が持ち合わせる本能のような行為のあとと言えさるだろう。ウェントワースはそういったものを見たときについて、「これはど即座にその意図を読み解くことができるというのが、未だに半ば神秘的に思われます。慣れっことになて決して慣れないでしょう」と語った。

01 忘れられた庭の魅力から

私が建築を学ぶ一方で惹かれ続けてきたのは、高密度都市にひっそりと存在する、建物のたっていない、人々から忘れられた庭のような場所だった。建築をつくるということは真逆にある風景に惹かれてしまうと、矛盾や不安や葛藤しているときに、テラン・ヴァーグという言葉に出会った。22年前に一人の建築家が当時最も重要な会議の一つであった「Any会議」で発表したこの言葉は、まさに、私が惹かれ続けていた風景につけられたものだった。修土設計ではこの「テラン・ヴァーグ」についての研究を行いその本質的な価値を提示すると共に、これらを都市の新たな庭として迎入れるための建築的提案を行うことを試みた。

04 テラン・ヴァーグと人々のふるまい

タバコを吸うひと、居眠りをするひと、自転車や空き缶をそっと並べて置いて立ち去るひと、道端に捨てられた壊れたものを組み合わせて遊ぶひと このような無意識的な、しかし一瞬の後ろめたさを抱くようなふるまいがテラン・ヴァーグでは多く見受けられた。こういった行為は人間が根本的に必要としているものであり、それらを許容する空間が、テラン・ヴァーグの魅力の特徴としてあげられそうだ。



05 テラン・ヴァーグあるある

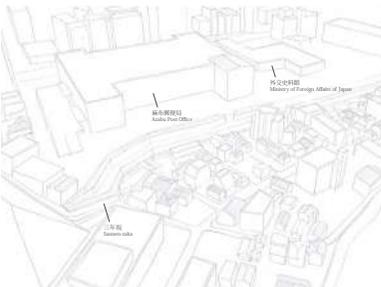
敷地をぐるりと「囲う」もの、片隅に「取り残され」た様々な断片、誰かの「遊び」の痕跡、「禁止」を呼び掛ける看板、解放された大地に「根をはる」植物たち、居場所を求めて「集まる」様々な生き物たち テラン・ヴァーグにつきものものたちについて『テラン・ヴァーグあるある』として小さな辞典にまとめてみる。



- 囲われる**
お金のかけられていないラフな囲われかたであるほど、不確定や生産性の無さを強調し、未知性や自由を想起させるより魅力的なテラン・ヴァーグを演出していることが多い。
- 取り残される**
都市に取り残された断片は、周囲とのギャップが大きければ大きいほど、人々により強い印象を与え、そこにあったであろう様々な物語を想起させる。時間や空間を越えたこの物語は、都市に暮らす人々にささやかな豊かさをもたらしてくれる。
- 遊ばれる**
生産性を失った場合は、人々の遊びを誘発する。人の目につかないような場所であるほど、無意識的な遊び（組み合わせる、配列するなど）が、目につくつかないかのギリギリの場所ではグラフィティなどの意識的な遊びが繰り返り広げられている。
- 禁止される**
テラン・ヴァーグは必ずと言って良いほど誰かに所有・管理されている場所である。立ち入りやゴミ捨ての禁止看板は起こらうる様々な事故の責任を回避するのに有効な手段として掲げられるが、テラン・ヴァーグの魅力を減らす要素でもある。
- 根をはる**
テラン・ヴァーグは、鳥や風が運んできた種が根をはり、植物が都市にお許しを請うことが許される貴重な場である。セイタカアワダチソウなど背丈の高い植物や葛は律儀に引かれた境界線を曖昧にし、ゆらぎをもたらす存在となる。
- 集まる**
植物が繁茂するテラン・ヴァーグには様々なミツバチ、鳥など都市に暮らす様々な生きものたちが集まっていく。小さな緑地が連続的に繋がった地域では、より豊かな種類のいきものたちを目にする事ができる。

06 テラン・ヴァーク図鑑

対象を東京都23区内でみられるテラン・ヴァークとし、合計21タイプについての構成と履歴の研究をおこなった。さらに、それらをアクトメと写真を用いた記述を通し、分析を行ったものを一冊の図鑑にまとめた。左ページでは構成要素と履歴を記述し、右ページではそこに現れてくるものを〈成分表〉として書き出している。これは、同じくボイド空間をリサーチしたアトリエ・ワン著『メイド・イン・トーキョー』のオマージュである。



雑壇擁壁
tiered retaining wall

造成源
場所：東京都港区ノ門

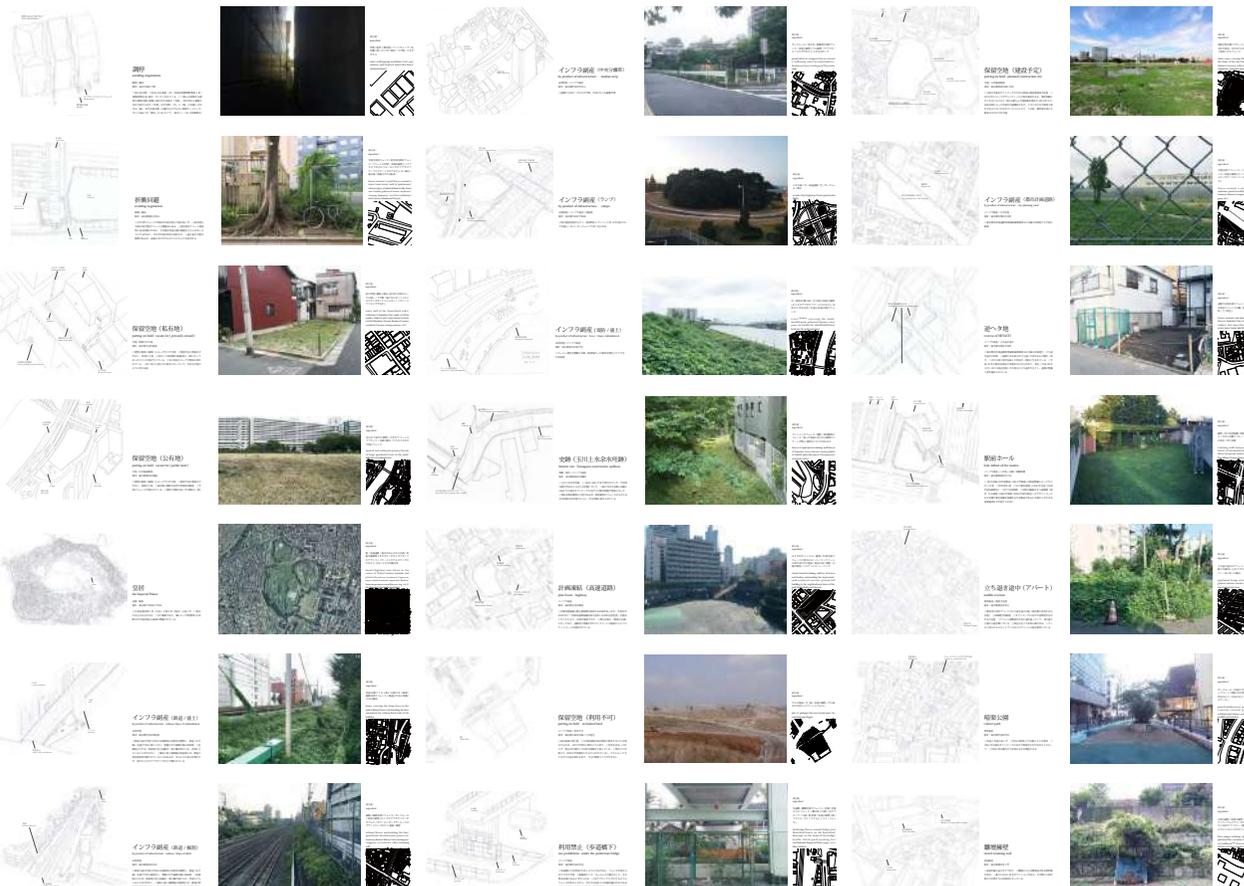
◎造成が繰り返されてきた。◎雑壇の上には郵便局や外交資料館が並び、一番下には古い住宅やマンションが建ち、その間の2段が他の生き物たちの居場所となっている。

成分表:
ingredient:

3段の雑壇 / 高地の雑物(セイタカアワダチソウ/アレチウリ/オオアザミ/オギなど) 枯れたアイビー / 雑壇の上の木 / 木の下に湧くこの水 / アンズ

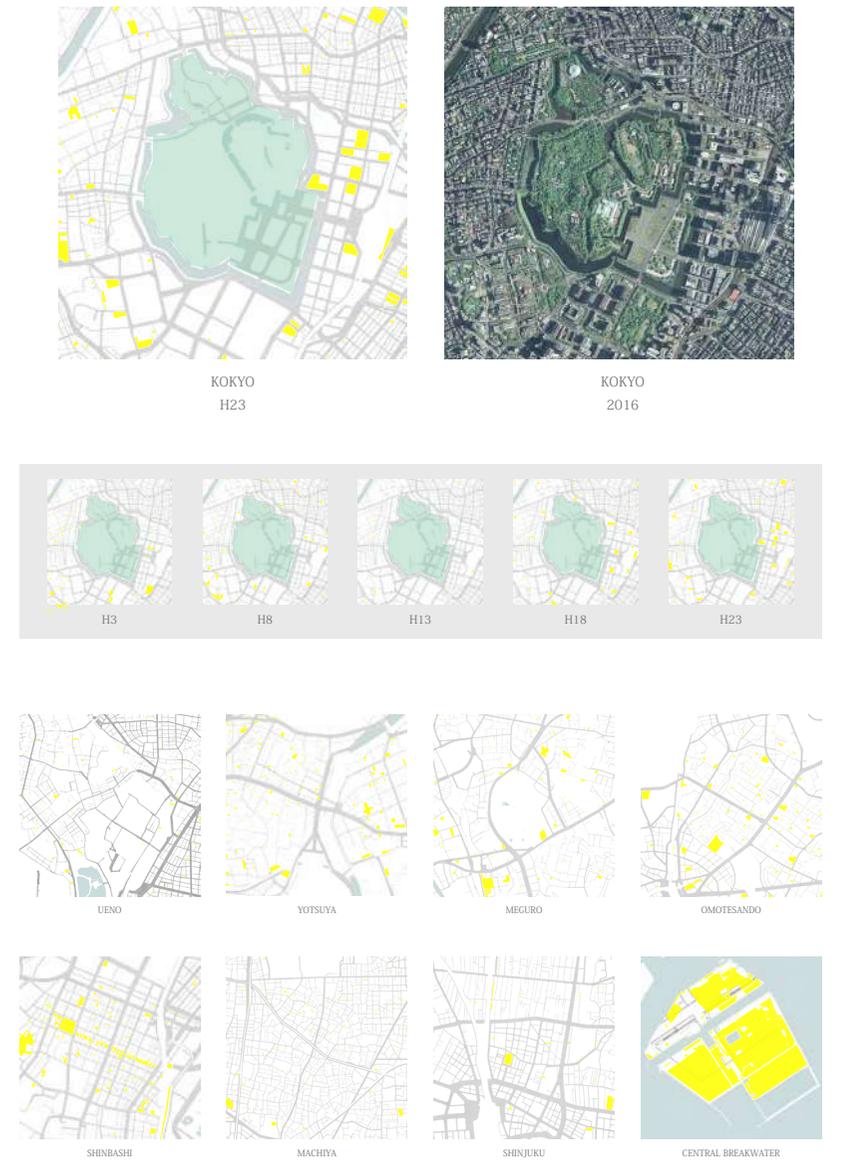
three stages retaining wall / weeds / Canada goldenrod / there are ivy / Japanese knotweed etc / withered ivy / trees on retaining wall / leftovers of forces under the tree





07 遍在する未利用地

テラン・ヴァークは都市では主に未利用地として地図に描かれることが多い。東京都土地利用現況GISデータを用いてその動向を観察したところ、ほとんど一定の割合で未利用地が存在し続けていることがわかった。いくつか特徴のある場所をピックアップしてGIFデータにしてみても、その動向がよく見えるようにした。下図は平成23年の未利用地(黄色部分)をプロットしたものである。





チューニングインフラ LIST (例えば)

- a : かえるのための連続的な緑地街道
- b : リスなど、小動物のための橋
- c : 屋根の上の遊び場の休憩所
- d : たぬき専用トンネル
- e : ミツバチの巣箱
- f : トンボが育つ小さい水辺
- g : 関東タンポポの保全

Terrain Vague とは、都市において、もはや空虚で占有されていない、不安定で曖昧な場であると同時に未知性や自由への期待を想起させる場を示す造語（フランス語）である。主に空地や未利用地として現れるこの風景は、用途や活動の不在がもたらす、ある種の清々しさが魅力的だ。一義的な有為性の感じられない風景が、人間の本質的な部分に作用する、ある種の豊かさをもたらしているのかもしれない。そんな Terrain Vague を、新しい都市の庭として迎え入れてはどうか考えた。そこをいきものたちが行き来できるようにネットワークを構築する。そうして植物のダイナミックな動きを受け入れる新たな都市のネットワーク = Terrain Vague Network を提案する。

Gap Dynamics ⇨ Terrain Vague



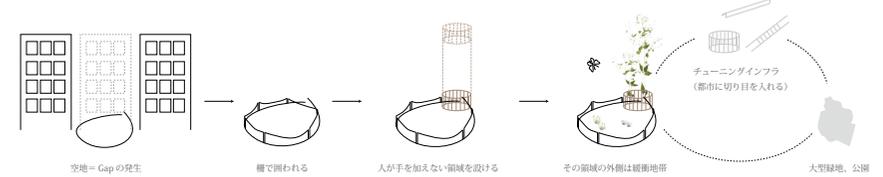
ギャップダイナミクスとは、森林生態学の用語の一つである。森林が、部分的に壊れては遷移することを繰り返し、全体として極相の状態を維持すること（狭義のギャップダイナミクス）や、そういった考え方（広義のギャップダイナミクス）を示す。森林におけるギャップとは、林床の暗い森林に出来た。林床まで光が差し込む期間である。極相林では背の高い樹により林冠が形成され、林内は暗い状態であるが、自然災害・伐採・老衰・病害等によって高木が倒れると、周囲を巻き込んで林冠に大きな開間を生じ、林床まで光が差し込む開間が出来る。この光あふれる大地には、林冠において育つことが出来なかった草花が姿をあらわし、そういった草花や光を求めて様々ないきものが訪れる。場所を移しながらも極相林には常にギャップが生じており、そこがいきものたちにとってのオアシスとなっているのである。

建物密集する都市において、テラン・ヴァークはまさにギャップの役割を担っている。これは主に空地や空地・未利用地として現れ、都市に生きる様々ないきものが訪れる場となっている。人間も例外ではない。一方現状、テラン・ヴァークは人々からポジティブに受け入れられることは少なく、どちらかと言えば治安悪化や騒音の夜叉、雑草の蔓延などの「空き地問題」として取り上げられるのが一般的だ。しかし同時に、2020年の東京オリンピックに向けて新国立競技場が新設される際、東京の中心に大きな空地が出現したのを見た人々から「このままでもいいのに」という声が上がったことは記憶に新しい。これは混乱の中で出てきた人々の本能的・本質的な要求なのではないだろうか。

テラン・ヴァークがあってよし（必要だ！）と、肯定的に捉えられる都市の実現に向けた、建築的提案を行う。

Terrain Vague Network の構築

例）建物と建物の間に生まれた空地

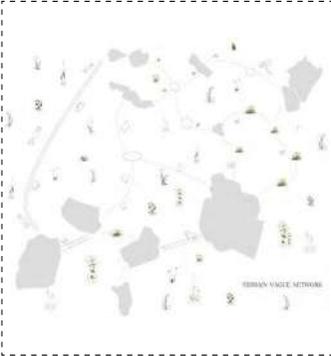


草刈りの頻度と植生の変化



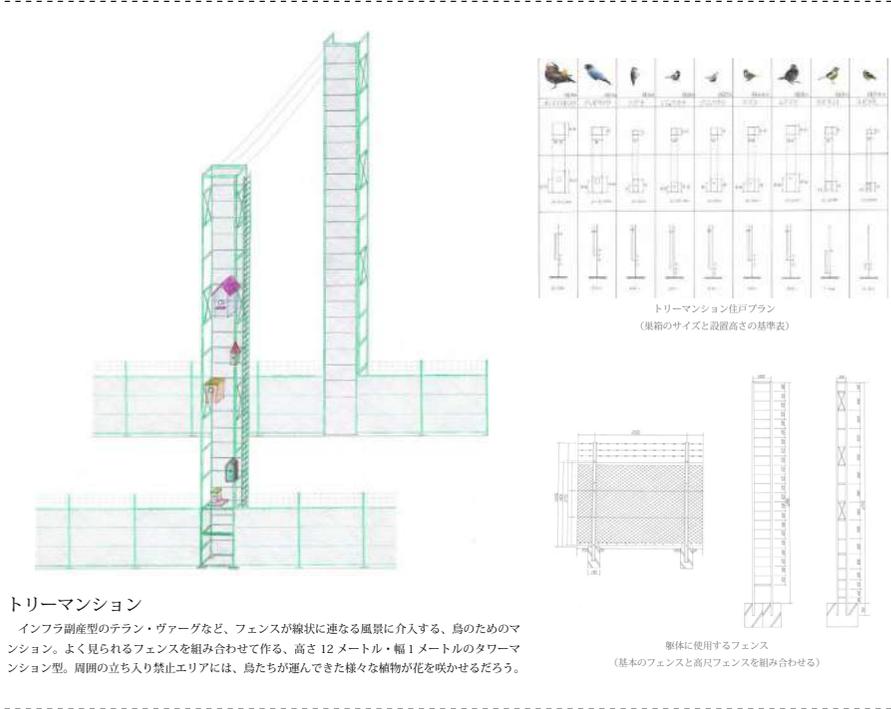
テラン・ヴァークを行き来する生き物たち (一例)

 蝶々	移動力は中程度で400〜600m。花壇や植込込みなどの植栽地や小規模な緑地でも誘致が可能。都心部でも広く見られる蝶々は判別しやすく、狭い範囲の生態系の指標性が高い。	 トンボ	移動力は中程度で700〜3km。樹林、草地、水辺地（池やアール）に生息し、生活史のステージにより生活圏域を変換。集積地は水辺で、人間の出入りの少ない荒れた場所の方が好まれることが確認されている。
 ミツバチ	移動範囲はおよそ半径2〜4km。受粉を促し、植物たちの生命活動を支える。原上での養蜂は、蜂蜜が収穫できるだけでなく、その成分を調べることでも地域の植生の観察を可能にする。	 カエル	移動力は高く、数100km飛ぶものまでいる。都心の樹林地に生息する鳥たちは、山間部での大きな動物たちからの捕食から逃れようとやってくるものが多く、警戒心が強いものが多く、人間の目を避けるように生活をしている。
			 タヌキ



Terrain Vague Network

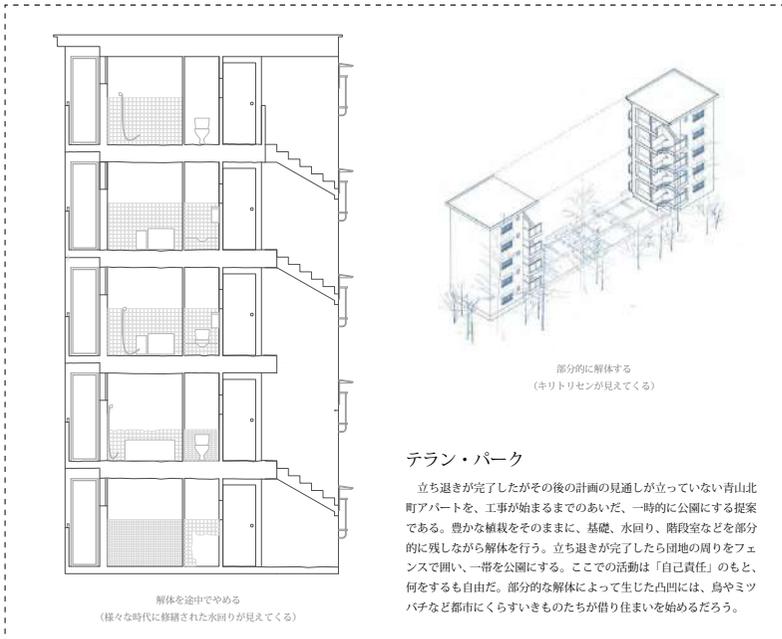
テラン・ヴァークを肯定的に内包する都市の実現に向けて、テラン・ヴァークと建築・都市空間の間に生まれる軌線をやわらげ、両者を含む全体的なまとまりとして空間の質を高めるような、小さな建築とそのネットワークの提案を行う。



トリーマンション

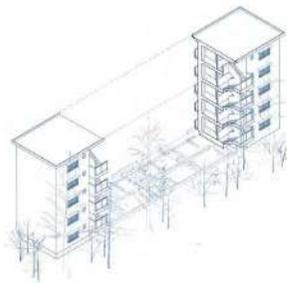
インフラ副産物のテラン・ヴァークなど、フェンスが線状に連なる風景に介入する、鳥のためのマンション。よく見られるフェンスを組み合わせて作る、高さ12メートル・幅1メートルのタワーマンション型。周囲の立ち入り禁止エリアには、鳥たちが運んできた様々な植物が花を咲かせるだろう。

躯体に使用するフェンス
(基本のフェンスと高尺フェンスを組み合わせる)



テラン・パーク

立ち退きが完了したがその後の計画の見通しが立っていない青山北町アパートを、工事が始まるまでのあいだ、一時的に公園にする提案である。豊かな植栽をそのままに、基礎、水回り、階段室などを部分的に残しながら解体を行う。立ち退きが完了したら団地の周りをフェンスで囲い、一帯を公園にする。ここで活動は「自己責任」のもと、何をすることも自由だ。部分的な解体によって生じた凸凹には、鳥やミツバチなど都市にくらすいものたちが借り住まいを始めるだろう。



部分的に解体する
(キリトリセンが見えてくる)



ハイウェイ・ブリッジ

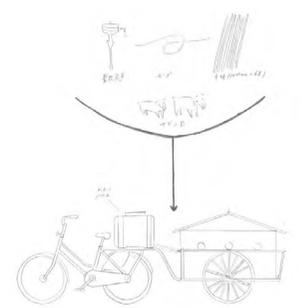
首都高によって分断された自然教育園とその飛びの間にかかる、動物専用の橋である。橋をかけることで、高い塀で囲われ、独立していた自然教育園の生態系を少しずつ回復し、結果として、周辺を含めた敷地全体の環境の変化を促すことができるのではないかと考えた。また、人間が利用することを想定しない、新しい構造やスケールを持ったストラクチャーは、一元的な有用性を超えて、都市に新たな豊かさや喜びをもたらすことだろう。



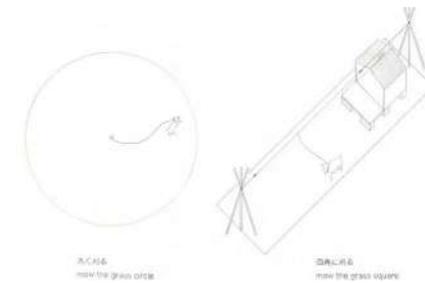
ヤギに草を刈られた空地
(一部は刈らずに残しておく)



植物が繁茂した空地
(そろそろヤギがやってくる)



草刈りヤギのパオ
セット内容



大尺フェンス
new the grass fence

高尺フェンス
new the grass square

草刈りヤギのパオ

空地問題としてよく取り上げられる雑草の草刈りをヤギに行ってもらうプロジェクトである。草刈りにつきものの騒音問題と廃棄物の問題をうかせることができる。また、植物の植生は、草刈りの頻度によって少し調整をすることができるから、部分的にヤギに刈らせない場所を設け、同一敷地内に植生のギャップをつくり、小さな敷地の集合でも生態系の動きを促すことが可能であると考えた。